エピソード69
保護者から苦情がきました

このエピソードでは、教職経験6年目、28歳女性の先生の経験を紹介します。

ジュリさん
教師を目指して勉強中

この先生は、採用6年目で初めて1年生の担任になったそうです。

今まで3年、4年、5年、6年、4年と中、高学年を持っていました。

新学期の当初、1年生の下校時間は早くなっています。てきぱきできない子もいるのですが、特に話を聞いていない子もいます。

下校前にはトイレに行くように学級では言っていたのですが、アミさんは玄関に出てからトイレに行きたいと言い出しました。トイレに行かせましたが、戻ってきてもすぐに列に入らなかったので「みんなが待っているよ。ごめんなさいでしょ？」といいました。

アミさん元気なのですが、マイペースなところもある子です。

先生は、アミさんがみんなを待たせていることに気づいて、謝って欲しかったんですね。

すると下校後、保護者から「トイレに行って、遅くなったからごめんなさい、はないんじゃないですか？」と苦情がきました。私としてはトイレに行くのは仕方がないけれど、その態度に対して注意したつもりだったので、心の中で「え…」と思いました。

先生にとっては、思いがけない保護者からのことばだったんですね。

そうでした。でも、1年生の子にそう感じさせて、それを保護者に伝えて保護者がそう感じたのなら、やはり私の配慮が足りなかったと思います。これからは誤解されないような対応を心がけようと思いました。

難しいことですね。

ジュリさんの気づき

先生が考えていたのとは、違う伝わり方が、子どものことばを通して、されることがあるんですね。

「子どもにそう感じさせて」→「それを子どもが保護者に伝えて」→「保護者がそう感じた」…子どもと保護者の認識に気を配るということがポイントですね。

お・し・ま・い

若い先生の保護者支援

ジュリさん

＜掲載してあるエピソードはエデュサポネットメンバーの経験をもとにした架空のエピソードです。＞

イラスト　尾上樹里
（北海道教育大学 大学院生）

COPYRIGHT © 2024 UEKI Katsumi, HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION all rights reserved.